

省燈首座の五位思想

佐橋 法 龍

二

省燈なる人物に就いては、その據る可き資料の乏しい爲、充分に知る事は出来ないが、延寶傳統錄卷廿七の眞如明叟齊哲禪師法嗣の項に「無塵省燈首座。號幻化道人。承嗣明叟。初參春屋施于天龍。典藏鑰。謁龍漱潭于南禪。居後版。又從東陵瓊於眞如。依止久矣。間以洞下偏正之訣。遂作五位之圖說。」とあるのに從へば、彼は中峰下明叟齊哲（一三四九寂）の法嗣で、夢窓下の春屋妙葩（一三八八寂）龍漱周澤（一三八八寂）、東陵派曹洞禪の祖東陵永瓊（一三六五寂）等に歴參してゐる。就中、東陵の會下にはかなり久しく止つて、専ら五位の參究に没頭したやうであるが、然し東陵の五位説には省燈も從つてゐない。即ち省燈の著偏五位圖説の序に於いて、省燈は「及至今日。人多捨其意求其相。而相也無分曉。不本於古人之意。各隨己意謾出五卦。強配五圈。其說愈多。其旨愈遠矣。予嘗疑之。遍參問老宿。旁看抄錄。并無一言可以解已疑也。一夜宿京城客舍。與信州來兄弟章上人。語話之次。忽然有得其要領。我當時直得無著歡喜處也。」と述懐してゐる。即ち省燈は早くより當時盛行の五位説に多大の疑問を抱き、その解決を求めて廣く諸處を遍參し、又諸典籍をも研究したが、遂にその疑惑は解かれず、延文三年（一三五八）、章上人に會うに至つて初めて會得する所があつたのである。

省燈首座の五位思想（佐橋）

る。彼の言ふ章上人なる人物に就いては全く分らない。語話之次忽然有得其要領と彼の述べる所に依れば、彼は章上人の示教を得て五位の要領を會得したのではなく、章上人との語話中、飄然と自得したものであらう。爾來彼は「遍正回互。疊也變也。所以五卦配五位。及古今以來。列位同異。名相訛亂。宛如視掌中果。」（五位圖說序）と述べてゐる様に、五位に關しては明快な解釋を得たものの如く、やがてそれが五年後に偏正五位圖說一卷として實を結んだのである。然し一方では「缺老宿之證明。心自許可而已。」（同上）と述べて、印可證明を受けざる自説への不安を吐露してゐる。曾て大日房能忍が印可なき自身の禪法に苦しんだ如く、省燈も又禪門が面授面稟を痛く重要視する社會であるだけに深刻に苦しんだらしく、洞上諸祖を遙拜して、はかない偶然に迄自説の證明を求めたりしてゐる。然し省燈はさうした不安にのみかられることなく、「乃得雲外和尚所撰寶鏡三昧玄義并曹洞旨訣。看之果與從前會得底相合者多矣。愈信其不妄也。」と述べて、曾て參學した東陵の師雲外雲岫の所説を學んでは相合する點の多きを知り、益々自説に對する自信を深め、遂に貞治二年（一三六三）偏正五位圖說一卷を著した。

省燈の事績に就いては上に述べた事以外は餘り多くを知り得ない。彼は全體識内を多く往來して遍參に終始し、晩年は幻化道人と號して何れかに隱棲したやうである。されば彼は一山の主としてその禪法を擧揚したこともなく、寂年すら分らない。

二

省燈の五位思想を伺ふ資料としては偏正五位圖說一卷があるのみであるが、此の省燈の勞作が南英謙宗（一四六〇寂）の手に依つて完全に今日に残されてゐる爲、省燈の五位思想はほど充分に知り得

るのである。省燈は前にも述べた如く、その生涯の殆どを遍參、隱棲に費した爲、彼の思想も、その勞作偏正五位圖說一卷も、それ程廣く禪門一般に知られることはなかつたであらうが、然し、曹洞所說の正統的五位擧揚に畢生の努力を傾けた南英が、偏正五位圖說の序跋を含む全文を引用してまで、省燈の五位說を徹底的に論破詰難してゐる事實は、決して省燈五位が當時輕く扱はれてゐなかつた事を示してゐると云へよう。恐らく諸派の祕訣と稱するものと共に、一部ではかなり權威ある見解として重きをなしてゐたに違ひない。所で省燈の五位思想であるが、彼は當時傳播してゐた石霜所說の五位を訛亂と斷じ、その位次も（一）正中偏（二）偏中正（三）正中來（四）偏中至（五）兼中到と、洞曹所說のものに改めて、大いに正統的五位說の唱導に努めた如くではあるが、然し、彼の五位說は決して正統的なものではなく、易學を根幹とした極めて非禪的非佛教的な思想である。勿論本稿に於いてはその全容を紹介敘述する事は出来ないで、今は省燈五位の易學的傾向に就いてのみ簡単に述べて、他は後日の機會に譲りたい。

そこで先づ偏正五位圖說の構成をみるに、（一）重離六爻圖（二）偏正五位圖（三）疊而爲三圖（四）變盡成五圖（五）重離出五卦總圖（六）五卦配五圖（七）正五位相圖（八）正五位名圖（九）正五位義圖（一〇）曹山五位君臣旨訣圖（一一）入五圖（一二）偏正五位名義總說の十一段階より成つてゐるが、八、九、一〇を除いては殆ど易說を根幹として偏正五位說を展開させてゐる。例へば第一の重離六爻圖に於いては易六十四卦中の一たる重離（通常離とのみ云ひ、省燈も周易正經直謂之離不復加重字と述べてゐる）の説明と、禪家が五位を説くに當つて、何故に六十四卦中離の一卦のみを敢てとつたかと云ふ獨取離卦の理由に就いて省燈は彼

の見解を述べてゐるが、その何れも、内容は禪思想と云ふよりも易思想と云ふ可き内容である。即ち獨取離卦の理由に就いて「凡曹洞家之立五位也明暗兩歧正偏二路耳。以明旦中之者爲偏也。明者陽也白也。以暗旦中之者爲正也。暗者陰也黑也。故丹霞云。借黑權正假白示偏。六十四卦中唯離一卦陰皆在二體之中。陽皆在二體之上下爲偏。餘皆不然。故獨取離卦耳。」とか又「獨取離卦貴在中爻不復取卦象也。」或は「明者離之德。火與日離之象也。所以貴離。在中爻之陰而明亦不取卦德卦象也。」と述べてゐる諸點がそれである。禪門に於いて五位を説く時、正偏明暗等の對立的概念が用ひられるが、それはどこまでも佛教乃至禪の教理思想に基づいたもので、決して易思想ではない。故に正と云ふも偏と云ふも、又明暗黑白と云ふも、それらは皆假りに權した所の方便的表現であつて、正偏明暗黑白を對立する固定的實體者と考へてゐるのでは絕對にない。従つて禪乃至五位の立場からすれば、絕對に離卦でなければならぬと云ふ理由はなく、唯離が乾坤坎と共に易六十四卦中の基本的な卦であり、型も陰陽の配置も、更には卦德、卦象の良い所から便宜的に一方法として取られたにすぎない。然るに省燈は上述の如く便宜的に利用された離卦に對して、離卦と五位との絕對的本質的な連關を抽出しやうと甚だ無理な努力を試みてゐるのである。即ち彼は三の如き離は正であり、暗であり黒である陰爻が中正の位に在る唯一の卦であるが故に、この離のみが六十四卦より敢て撰ばれたのであると云ふ。然しこの省燈の見解は甚だ多くの矛盾を含んでゐる。先づ第一に正である陰を中正の尊貴なるもの（周易三才の位に依れば第五爻は君、天子の位である。そこで省燈はこの陰爻、正を以て不偏不倚過不及なき中であり、尊貴なるものと説く）と云つて、偏

である陽に對しては「非中之者皆邪也。邪也者皆偏也。」と云つてある點である。此のやうな、正偏を固定的實體者と見て、その間に正邪尊卑の差別を附するが如きは、二者超絶不即不離の無礙境を常に道破せんとする禪の正しい立場からは程遠いもので、正と云ひ偏と云ふも元來は同一物の兩面で、何等その間には尊卑正邪等の差別はないのである。かかる易に誤られたる態度は偏正回互の理の見解に於いても顯著である。即ち彼は(一)偏正回互圖に於いて「所謂回互者。先自初二以爲偏正回互。其象如此二。啓蒙所出少陰是也。次自二至三以爲正偏回互。其象如此二。啓蒙所出少陽是也。次自四至五其象如此二。後自五至上其象如此二。而上下二體各出少陽少陰。謂之偏正回互也。」と云つてゐる。是も亦甚しい誤りである。抑、偏正回互は事理の相即圓融無礙なるを云つたもので、易の云ふ陰と陽との交渉とは全く性質の異なるものである。所謂易に於ける陰と陽とは互にその本質を異にする對立者で、佛教の云ふ理と事との關係とは全く異なるものである。此の外省燈は正中偏を震三として「以卦爻論之。即上二爻爲陰下一爻爲陽(中略)即震本從坤之純陰一陽方生下」と説き、これに基づいて●なる圈兒を畫き、更に正中偏が(1)正位中に偏を含み(2)正位中より偏に向ふ位であることを述べてゐる。又偏中正に就いては巽三、●となして「以卦爻論之即上二爻爲陽下一爻爲陰。(中略)即巽本從乾之純陽一陰方生下。」「以圈兒論之即二分白下一分黑(中略)從純白之中來方生一分黑。」と説き、こゝから「一者偏位之中有正。二者從偏位之中還向正。」との偏中正の内容を説いてゐる。勿論省燈の五位説も部分的には正當な箇所もある。偏中正を以て「舍事入理。事偏理正。亦謂之奪境不奪人。」と云つてゐるあたり、又正中來を「正中來者從正位之中來。得位居

中。不復見偏」と述べてゐる點等、曹山洞山の原意に近い。乍併、先づ卦を示して易理に依るその卦象を論じ、その上に立つて五位の理を展開してゐる。従つて省燈の五位説はその説明にたとへ禪本來の意に近い語を用ひたとしても、それは常に易理易説との密接な聯關の下に用ひられてゐるのである。されば根本に於いて上述の如く誤つてゐる省燈の五位説は所詮非正統的非佛教的な誤れるものと云ふ可きであらう。

1 南英撰偏正五位圖說詰難序參照。

2 易以乾爲君以坤爲臣。乃是陰陽尊卑之常也。若以六位論君與臣則無陰無陽。皆以居五之爻位爲君。除五之外不當君位。是諸卦之通例也。(五位圖說(二)偏正回互圖)

3 中也不偏不倚。無過不及之名也。中則兼正。故名中爲正也。

(同右)